

教職大学院Newsletter 94

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職大学院Ne wsletter編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10248



教職大学院

Newsletter No. 94

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.2.17

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2017 Spring Sessions 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2017 spring sessions

2/17(Fri) 17:30-18:40

2/18(Sat) 9:30-17:40

2/19(Sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V(教育系1号館)
総合研究棟
アカデミー・ホール

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2017.2.17-19

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会

内容

ラウンドテーブルによるこそ (2)

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

Pre-session / 特別企画フォーラム (3)

保幼小教育フォーラム (4)

Students' Poster Session/学び de 交流タイム (4)

ZoneA 学校 (5)

ZoneB0 教師 (6)

ZoneC コミュニティ (10)

ZoneD 授業 (11)

省察的实践学会 発足にあたって (12)

round table cross sessions (12)

実践し省察するコミュニティを結び支える (13)

ラウンドテーブルの広がり と 深化 (15)

ラウンドテーブルの歩み (16)

アーカイブ (18)

基金のお知らせ / スケジュール / 編集後記 (24)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2017年2月の開催をもって32回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、2日目には熱気あふれる児童生徒たちによるポスター発表、学校 (Zone A) ・教師 (Zone B) ・コミュニティ (Zone C) ・授業 (Zone D) の各領域に分かれたセッションを展開し、そして最終日のクロスセッションでの語り合い・聴き合いへと続きます。今回は特別企画フォーラム「社会に開かれたイノバティ

ラウンドテーブルによるこそ

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions に参加いただき、ありがとうございます。

16年の年、32回の積み重ねの中でつねに展開し続けているラウンドテーブルですが、大切にしていること、願っていることは変わりません。実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

それぞれの分野では、固有の技術や言葉や型を彫琢していますが、実践のプロセス、それを通した実践者としての学習と成長の道筋に関心をもって聞けば、そこには分野を超えて共有できる、されるべき実践の中での知とその成長のストーリーが紡がれていることに気がきます。そして、そこで捉え返され共有される長い実践展開のストーリーが、次の自他の実践の展開を支えるフレームとして生きて働いていくことを実感してきています。その時ラウンドテーブルは、一過性の集会ではなく、それぞれの実践のコミュニティでの営みとその意味を問い返し、その持続と発展を支える省察的なコミュニケーションのためのメタコミュニティとして働き続けていることになります。

こうした省察的なコミュニケーションとそのコミュニティを通して、地域を越え分野を超え、しかもそれぞれの分野の実践の長い展開に根ざした協働探究の可能性がひらかれるならば、それぞれの実践の蓄積と多様性を活かしたパブリックなコミュニケーションを編んでいく可能性につながっていくのではないかと。それは公教育(Public Learning)とその理念への問いと、それぞれの持ち場での日々の実践との見失われた環を問い直す、編み直すプロセスにもつながっています。その問いは、教育学部・教職大学院の存在する根本的な理由に根ざしています。

プレセッションから多様なサイクルの積み重ねを通して、互いの実践の展開を跡づけ、意味を共有し、次の展開へと視界をひらいていく3日間にできたらと思います。

語り手以上に聴き手の力が問われるラウンドテーブルです。今回もまたセッションを通してプロセスを追う力を培っていきたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

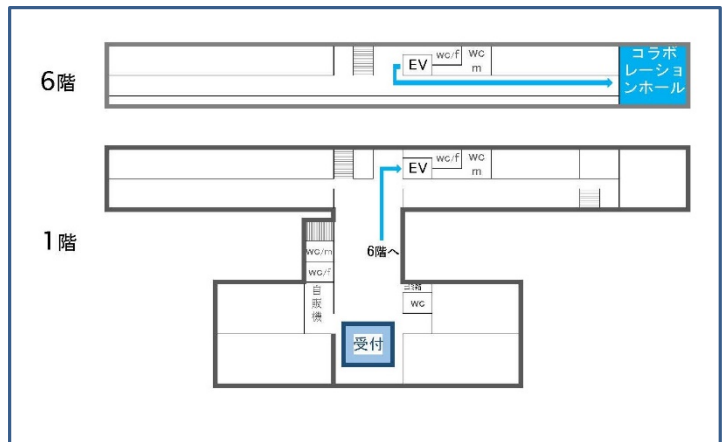
2/17 (fri) 17:30-18:40 会場：教育系1号館6階コラボレーションホール

Pre-session 教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

2/18 (Sat) 9:30-10:50

会場：教育系1号館大2講義室

特別企画フォーラム



「社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦：財務省との連携に基づく「財政教育プログラム」の試み」

グローバル化，知識基盤社会，少子高齢化，人工知能が雇用に及ぼす影響など，子どもに迫る厳しい将来を前に，次にどう足を踏み出せばよいのか——現場の教師の偽らざる実感である。この戸惑いは，一方で，「これまでも様々な方法を試みてきたではないか」というやりきれなさであり，他方で，それでもなお，子どもの将来に責任を負わなくてはならないという専門職としての自覚が複雑に入り混じった両義的な感情のあらわれなのであろう。

特別企画フォーラム「社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦」では，この戸惑いを大事にした。もう少し丁寧に言えば，戸惑いを抱えながら何かを試みることに力を与えたいのだ。「イノバティブ」という言葉を，そのような試みを促す優れた概念として，また，「社会に開かれた」という言葉には，地域社会がもつ教育資源と互恵的な連携関係に基づいて社会的要請に応える新しい教育方法を模索するという課題意識を凝縮させたい。

省察を加える試みは，財務省と連携して実施した財政教育プログラムである。財務省にとって，また，三つの実践校の教師にとって，そして，受講した生徒にとって，このプログラムは，何をもたらしたのであろうか。ここでは実践内容の紹介よりも，実践の持つ意味や可能性について理解を深めたいと考える。そうするために，生徒自身に財政教育プログラムにおける学びについて語ってもらう。この「語り」を中心にすえて会をすすめていく。生徒たちは何を学びとったのか，そこから，教師は，財務省は何を学びとるのか。多くの方々にご参会いただければと思う。

Session 0 オリエンテーション 9:30-9:35

Session I 財政教育プログラムの試み 9:35-9:55

Session II 財政教育プログラムにおける学びとは？ 9:55-10:40

A 生徒は何を学んだのか？—生徒によるトークセッション—

奈良女子大学附属中等教育学校，富士市立高等学校，福井県立敦賀高等学校の生徒

B 教師は何を学んだのか？—教師によるトークセッション—

海老原 宗貴（財務省主計局調査課・課長補佐）

鮫島 京一（奈良女子大学附属中等教育学校・教諭）

遠藤 健（富士市立高等学校・教諭）

玉井 淳（福井県立敦賀高等学校・教諭）

Session III 社会に開かれた学びの創造に向けて 10:40-10:50

司会：木村 優（福井大学教職大学院・准教授）

11:00-12:20 会場：教育系1号館大1講義室

保幼小教育フォーラム 「子どもの世界を広げ、つなぐために」

幼稚園・保育所・認定こども園は、子どもが家庭から社会へと初めの一步を踏み出す場であり、さまざまな人や物に触れて、大きく成長していきます。そしてその育ちが小学校へとつながっていきます。このセッションは、幼児期から学童期の、子どもの世界が広がっていく始まりの時期に焦点を当て、園や学校でどのように子どもたちの育ちを支えられるのか、考えたいと思います。具体的には、まず保育園・幼稚園・小学校から、それぞれの取組について1つずつ話題提供いただきます。若い保育者も多い幼児教育の現場で、子どもの育ちを支える力をいかにして高めたらいいのか。園内での研究保育や事例検討をどのように進めたら保育者の力量につながるのか。幼児期の子どもの育ちを小学校の授業の中で生かし、伸ばしていくにはどうしたらいいのか。3つの報告を踏まえて、小グループでお互いの取組を交流しあい、一緒に考えていけたらと思います。幼児教育や小学校教育に関心を持つ多くの方のご参加をお待ちしております。

話題提供：社会福祉法人華光会二葉保育園（福井県越前市） 泰園澄 一法 先生
 滋賀県豊郷町立豊郷幼稚園 沢 智子 先生
 福井県福井市西藤島小学校 西片 善江 先生
 コーディネーター：岸野麻衣（福井大学教職大学院）

11:00-14:10 会場：総合研究棟13階大会議室

Students' Poster Session/学び de 交流タイム

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来のイノベーション』

これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生・高校生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

11:00 - 12:20 Students' Poster Session

12:30 - 13:10 ランチ・休憩

13:10 - 14:10 学び de 交流 タイム

小学生「きずなをつくる」 ★ 中学生「夢 語ろう会」 ★ 高校生「イノベーション 語ろう会」



Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ 支え合うコミュニティに向けて

会場：教育系1号館 2階 大1講義室 /1階 11, 12, 14講義室

これまでZone Aでは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、協働の在り方について議論を積み重ね、その重要性を様々な角度から確認してきました。大きく変動する21世紀の社会を生きる子どもたちを支えるためには、教師一人の力では限界があります。だからこそ教師同士の協働性をいかに作り出せるか、それがこれからの学校に必要な問いではないかと私たちは考えたからです。

こうした問題意識は、平成27年に中央教育審議会の答申で提起された「チームとしての学校」という方向性に端的に表れているように、今や学校に関わる人々の間で周知のものとなっているように思います。この答申では、「チームとしての学校」を実現するために、専門性に基づく連携、学校のマネジメント機能の強化、教職員が力を発揮できるための環境整備の3つの視点が重要だとしています。確かにこうした視点の重要性は明らかです。しかし、「チームとしての学校」を実現するために最も欠かすことができないのは、教職員一人一人が同僚をはじめとする他者といかに支え合うか、その具体的な在り方そのものにあるのではないのでしょうか。連携がいかにスムーズに進んでも、マネジメントがいかに精緻になされても、環境がいかに整えられても、そこにチームは実現しません。日々の何気ない日常の中で、学校に関わるスタッフがともに語り合い、励まし合い、問題を考え、解決を見出していく、そうしたお互いを「支え合う」活動が、教師のコミュニティをチームたらしめているはずです。

そこで今回のZone Aでは「支え合うコミュニティに向けて」というサブテーマを設けました。幼児教育からは世代を超えて学び合い育ち合う保育士さんたちの実践を、小学校からは自主的な実践の学び合いの意義を、特別支援教育からは実践知の継承の取組を、と言うように異校種、異年齢、様々な立場の先生方からの話題提供を受けて、参会者が支え合うコミュニティについて、捉え直すことができたらと願っています。さらに立場を超えた参会者同士が、教師や保育士のコミュニティを支え合う実践について語り合い、その可能性を見いだしていくことができればと思っています。

Orientation 13:00-13:10

<1号館2階 大1講義室>

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

<1号館1・2階 フロア>

Session II シンポジウム 14:20-15:50

<1号館2階 大1講義室>

シンポジスト：

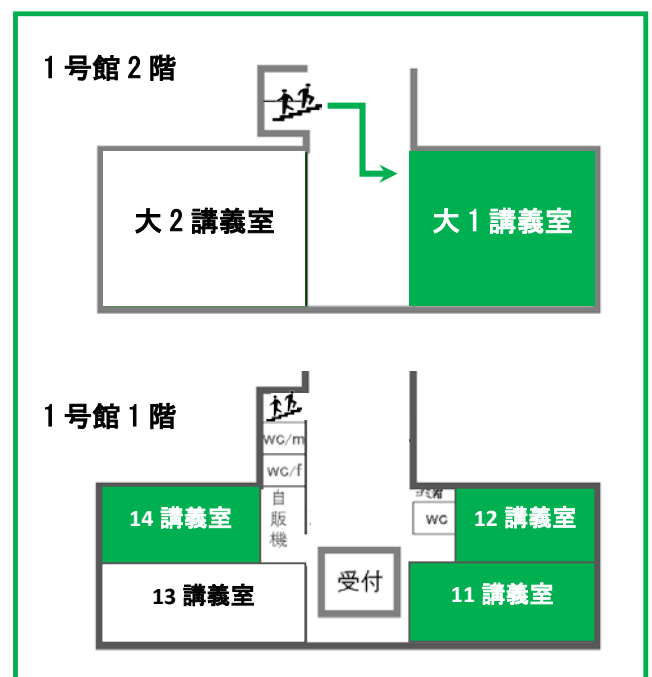
高浜町保育所研究グループ ぴっか
坂井市立春江小学校 教諭 山田俊行 氏
福井県立ろう学校 校長 小八木隆 氏

コーディネーター：

福井大学教職大学院 荒木良子

Session III フォーラム 16:00-17:40

<1号館1階 11/12/14講義室>



Zone B 教師

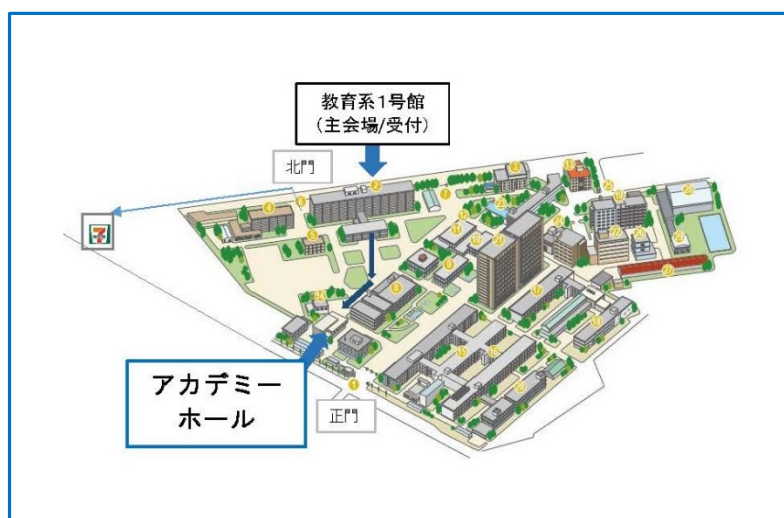
21世紀の教師教育をイノベーションする

B0 福井型教育の日本から世界への展開

会場：アカデミーホール

日本の公教育システムの中でも、特に優秀な成績を収めている福井の教育システムを世界発信することにより、教育を通じた諸外国との強固な信頼・協力関係の構築、日本の教育機関の国際化の促進、日本の教育産業等の海外進出促進を目指します。

- 12:00-13:30 Presentation「アフリカ授業研究による教育の質的向上」
Ethiopia, Malawi, Uganda 他
- 13:30-13:40 「日本型教育の海外展開推進事業」について
- 13:40-15:30 キックオフフォーラム「福井型教育の日本から世界への展開」
小林 栄三 氏 (伊藤忠商事株式会社社長)
鈴木 規子 氏 (独立行政法人国際協力機構理事)
淵本 幸嗣 氏 (福井県教育庁企画幹)
柳澤 昌一 (福井大学教職大学院専攻長)
- 15:30-15:45 休憩
- 15:45-17:30 セッション (参会者による小グループでの意見交換)
- 17:30 閉会挨拶



B1 管理職養成の今日的な意義を考える ―教職大学院の可能性と課題―

会場：教育系1号館 1階12講義室/ 6階コラボレーションホール

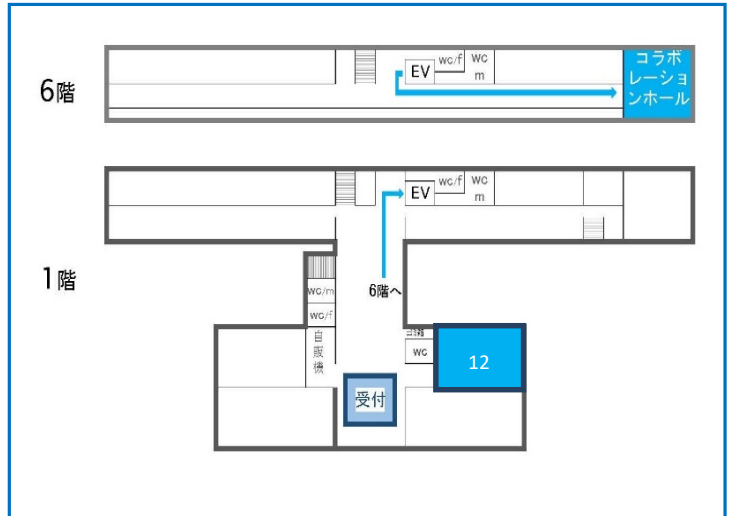
Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

次期学習指導要領においては、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、カリキュラム・マネジメントの確立やアクティブ・ラーニングの視点からの学びの実現などが改訂の基本方針とされています。それに先立ち、中央教育審議会は、平成27年12月に、教員の資質・能力の向上を目指す制度改革、「チームとしての学校」の実現、地域と学校の連携・協働に向けた改革を柱とする三つの答申を示しました。このような動向の背景には、社会の急速な変化に伴い、学校教育において求められる人材像が変化していることや、学校現場が抱える課題が複雑化・多様化していることがあげられます。

こうした中、これからの教員は、新たな学びを展開できる指導力を修得するとともに、複雑かつ多様な課題に、幅広い視野に立って柔軟に対応できる指導力、同僚と協働して、組織として困難な課題に対応できるマネジメント力、地域との連携等を円滑に行うためのコミュニケーション力などを身に付ける必要があります。

中教審の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(H27.12.)では、教職大学院において、管理職候補者となる教員に対する学校マネジメントに係る学修の充実を図り、管理職コースを設置することや、教育委員会との連携による管理職研修を開発・実施することの必要性が謳われています。このことを踏まえ、福井大学教職大学院では「学校改革マネジメントコース」を平成28年4月から新たにスタートさせました。兵庫教育大学でも「学校経営コース」に加え「教育政策リーダーコース」を、大阪教育大学は「学校改革マネジメントコース」(H27.4～)をそれぞれスタートさせ、岐阜大学では平成29年度から「学校管理職養成コース」が設置される予定です。

そこで、今回の Zone B1 では、関係のシンポジスト5名で、管理職養成の今日的な意義や教職大学院の役割などについて、マネジメントリーダーの資質・能力、カリキュラム・マネジメントや「チーム学校」を実現できるような教職大学院のカリキュラムの在り方なども交えながら論議していただくとともに、引き続いて行われるフォーラムでは、少人数のグループで参会者の皆様方と共に論議していきたいと思っております。



Orientation 13:00-13:10 <1階 12講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション <1号館1・2階フロア>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <6階 コラボレーションホール>

シンポジスト	兵庫教育大学教職大学院教授	日渡 円 氏
	大阪教育大学連合教職大学院教授	大脇 康弘 氏
	岐阜大学教職大学院教授	篠原 清昭 氏
	文部科学省初等中等教育局	
	教職員課課長補佐	大江 耕太郎 氏
	福井大学教職大学院教授	三田村 彰
コーディネーター	福井大学教職大学院教授	松木 健一

Session III 16:00-17:40 フォーラム

Session I, II を受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

B2(a) これからの学部段階の教員養成を考える / 実践を聴き、夢を語る

会場： 教育系 1 号館 1 階 11 講義室/ 総合研究棟 13 階大会議室

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの改変が求められてきています。しかし、長い蓄積の中で培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践と経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

昨年6月のラウンド・テーブルで、学部の教員養成に携わる当事者が、互いの取り組みを聴き合い、語り合う新しいセッションが初めて開催されました。二回目になる今回は、新たに学生中心のセッションが生まれています。大学における教員養成をどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。さまざまな背景と専門を持ち、学部での教員養成に携わっている当事者同士、現実の中での互いの取り組みを聴き合い、語り合う場を創っていききたいと思います。

前回同様今回も、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを聴き合うことを中心に据えたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも含めて共有し学び合いながら、これからの学部における教員養成への夢を、当事者としてふくらませていくことができればと思います。

互いの現実とそこでの取り組みを聴き合うことを通して、また夢を語ることを通して、さまざまなキーワードがセッションの中で浮かび上がってくる。それをさらに次回のセッションにつないでいきたいと思っています。

B2(b) 学部学生のクロスセッション 授業/活動 一語ろう・聴こう・出会い直そうー

会場： 教育系 1 号館 1 階 11 講義室/ 総合研究棟 13 階大会議室

「教職への夢が語れる教員養成」へと展開していくためには、どんな課題と向き合い、どのように解決していけばよいのでしょうか。前回立ち上がった【Zone B2】では、全国から集ってきた大学教員たちが、それぞれの大学で実践している授業や活動をもとにセッションを行い、この「問い」と向き合いました。互いの取り組みにおける課題を語る中で、そこから浮かび上がってくる Key word によって、これからの教員養成に対する夢が語り合えると期待していたのです。

確かに、Key word はたくさん表出してきました。しかし、「夢が語り合える」ほどのものであったのかという疑問が残りました。それは、Key word のほとんどが、教員の立場で見出してきた課題から立ち上がってきたものだったからなのかもしれません。そして、改革を押し進めるためには、教員養成における学びの主体者である学生たちの課題を踏まえたものでなくては、「夢が語り合える」ような Key word にはならないのではないか、といった新たな「問い」が生まれてきました。

【Zone B2b】は、このような「問い」を受け、新たに立ち上がった学生たちのクロスセッションの場です。まずは、「自分たちは、あるいは他大学で学ぶ学生たちは、どのような授業や活動を通して、何を学んでいるのだろう」と言ったところから、語り合い、聴き合ってほしいと思います。互いの取り組みを聞き合う中で、授業や活動の中に潜在していた意味ある課題と出会い直すことができるかもしれません。学生と教員が一緒に夢を語ることで Key word も、そこからなら見つかるのではないのでしょうか。学生の皆さんの参加をお待ちしています。

- Orientation** 13:00-13:10 <1号館1階 11講義室>
- Session I** 13:10-14:10 ポスターセッション <1号館1・2階フロア>
- Session II・III** 14:30-14:45 オリエンテーション <総合研究棟13階大会議室>
- 14:45-16:40 教員養成を考えるクロスセッション / 学部学生のクロスセッション
 福井大学, 静岡大学, 信州大学, 長崎大学, 中部大学, 江戸川大学,
 四国大学, 文京学院大学, 福井工業大学 他
- 16:45-17:20 振り返り
- 17:20-17:40 閉会



Zone C コミュニティ

何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか

会場： 教育系1号館13講義室 / 共用講義棟 3階310, 320 4階420

急進的な改革はないが、長年にわたって絶えず発展を続けている取り組みがある。一方で、当初は理想的に見えても、短期間で頓挫してしまう取り組みもある。この違いはどこから生まれてくるのだろうか？

これまで Zone C では、コミュニティの持続可能性に関わる課題を探究し続けてきた。そして、学校以外の場でも人の学びを支える多様なメンバーと協働探究を続けてきた。メンバーの多くは、地域社会の学びの場をコーディネートする役割を担っているが、それぞれの取り組みを持続可能なものに行っているのは、力量あるコーディネーターなのだろうか？

学校内外問わず、コーディネーター役を担っているスタッフが永久に居続けることはない。定期的にスタッフが入れ替わるのが常である。そうすると、特定の力量ある個人が取り組みを支え続けるという形には必ず限界がある。スタッフが入れ替わっても発展が持続する仕掛けが組織に備わっていなければならない。それは何なのか？

Zone C では、community という言葉に地域社会や共同体といった訳はあてず、コミュニティという語が使われてきた。それはおそらく、特定の場所や集団ではなく、そこにいる人々によって営まれているコミュニケーションの構造に目を向けているからだろう。今回はコーディネーター個人の力量ではなく、それぞれの取り組みの発展を持続可能なものに行っている仕掛けやコミュニケーション構造に目を向け、これからスタッフが入れ替わっても発展を持続させるためにどのような取り組みが求められるか、多様なメンバーで考えていきたい。

Orientation 13:00-13:10 <教育系1号館13講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <共用講義棟 3階 310>

シンポジスト 福井市旭公民館 竹内 きみえ 氏

福井大学探求ネットワーク 松本 恵哉 氏 , 河端 尚輝 氏

コーディネーター 福井大学教職大学院 富永 良史 , 宮下 哲

Session III 16:00-17:40 フォーラム <共用講義棟 3階320, 4階420>

Session I, II を受け、5~6名の小グループとなり実践の交流を行います



Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するか

会場：教育系1号館 2階 大2講義室, 203, 204, 207 1階 13講義室

教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続け、新しい時代の授業づくりへの意欲を高め維持していくために、そして、未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えるために、日本独自の学校文化・教師文化である授業研究に大きな期待が寄せられています。しかし、ただ授業研究を実施すれば教師の指導力や授業づくりへの意欲が向上するわけでもなく、また、子どもたちの学力や生活力が向上するわけでもありません。何のために授業研究を実施するのか、いかなる授業研究を実施するのか、どのように授業研究を実施するのか、私たちはこれらの問いを常にもちながら、確かな戦略をもって授業研究を実施することが必要になります。

Zone Dでは引き続き、「専門職の資本」※という考え方にに基づき授業研究についての検討を進めながら、今回は次期学習指導要領改訂に向けて「子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するか」というテーマで各Sessionを進めていきます。未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えている実践者や研究者の方々、「専門職の資本」を磨きはじめた若い実践者の方々にご参会いただければと思います。

※「専門職の資本」は人的資本、社会関係資本、意思決定資本の3つからなり、これらは、教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続けていくために投資できる（磨いていける）ものです。Zone Dでは、授業研究の力を「専門職の資本」へ投資するという観点から、参会者の皆様と一緒に考えていきたいと思います。

Session 0 オリエンテーション 13:00-13:10 <1号館2階 大2講義室>

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム 14:20-15:50 <1号館2階 大2講義室>

「次期学習指導要領改訂に向けて授業研究をいかに組織するか」

シンポジスト 鼎談

福井大学教育学部附属中学校・教諭 森田 史生 氏

埼玉県立新座高等学校・教諭 金子 奨 氏

玉川大学教育学部・教授 石井 恭子 氏

Session III フォーラム 16:00-17:40
<2階 203/204/207, 1階 13講義室>

「子どもと教師の学びを支える授業研究の実践」

A. 学校における授業研究の多様性から学び合う

A-1 信州大学附属長野小学校の実践

福井大学教育学部附属小学校の実践

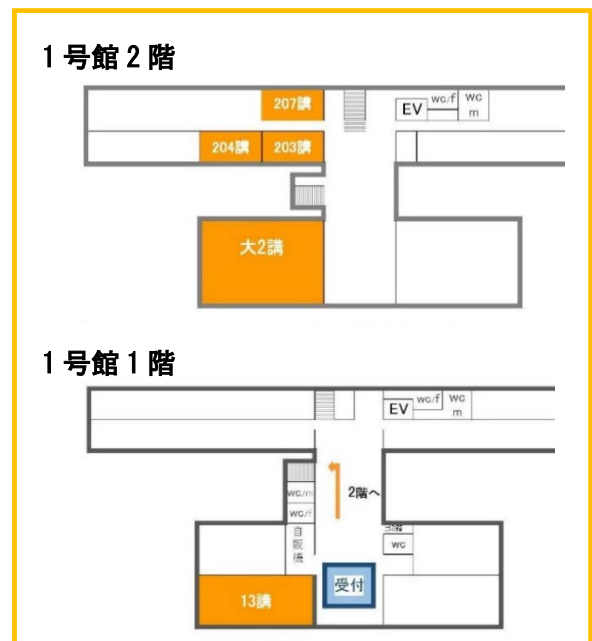
A-2 福岡教育大学附属福岡中学校の実践

越前市武生第一中学校の実践

B. 高校における授業研究の発展

大東学園高等学校 福井県立敦賀工業高校

C. 授業研究の国際展開 Globalization of Lesson Study



18:00-18:40 会場：教育系1号館6階コラボレーションホール

省察的実践学会 発足にあたって

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月、＜省察的実践学会＞の呼びかけを始めました。以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。正式な発足に向けて、学会の趣旨を共有し、学会の根幹をなす雑誌「省察的実践研究」の発行に向けた進め方について確認するセッションを持ちたいと思います。

2/19

(sun) 8:20-14:00

Session IV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る round table cross sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | | |
|-------|-------------|--|
| ①はじめに | 8:30-8:40 | ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。 |
| ②自己紹介 | 8:40-9:00 | それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 |
| ③報告Ⅰ | 9:00-10:40 | 実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。 |
| ④報告Ⅱ | 10:40-11:40 | グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 |
| ⑤報告Ⅲ | 12:20-14:00 | 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。 |

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中からはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳沢 昌一 『教職大学院ニューズレター』 No.11 ,2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II →省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

分散型コミュニティへの挑戦 ラウンドテーブルの広がり と 深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保障するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「垣塙（るつば）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこ

でコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がり と 各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がり と 深化』2015.3.31)

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2016.6

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンド・テーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
- 2001.11.10-11 実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働(第 1 回)
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンド
テーブルが開催される。(参加者 20 数名)京都ユースホステル協会 福井市公民館主事
つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネ
ットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ~現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む)(第 3 回)
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 4 回)
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第 5 回)
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第 6 回) 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海~2009)
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)~現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第 8 回 参加者 100 名超)
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第 10 回)
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第 12 回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 14 回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 15 回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回)稲垣忠彦
- 2009.6.27.28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第 17 回)5 つの領域:専門職として学び合うコミュニティ
(分野ごとのセッション始まる)

- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を超える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回)
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学)
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回)
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム , 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回)
11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム ,
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名
7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム

Archive —アーカイブ—

ラウンドテーブル 2009 Spring Sessions と 2016 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を, Newsletter No.24 (10.07.27)と No.89(16.10.15)からご紹介いたします。

Newsletter No.24(10.07.27)より

「前に進む勇気が湧き上がる」福井大学ラウンドテーブル

お茶の水女子大学大学院 吉見 江利

今回は専門領域, ラウンドテーブル, 専門領域という構成で, 実践への展望に手ごたえを感じる事ができた。

その流れを追うと, 自身の関心により, まず SESSION2 では②コミュニティの学習を支援する専門職の領域に参加した。福井市の各小学校区にある公民館に地域人であり公民館主事として勤務されてきた中島さんより, 研修で出会った福井大学の柳澤先生と毎月 20 年以上, 自主主事会「つむぎの会」を継続していること, 福井の公民館のことがわかる冊子「福井の公民館」の作成, 多様な団体の活動を「次につなげ」, 連携させてきたことなどの先進事例をお聞きした。

翌日の SESSION3 の「実践研究ラウンドテーブル」では, 学校教育関係者 4 名, 院生 1 名と私, という構成の中, まず私が江戸川総合人生大学(区長部局に設置された区民大学)で子ども支援学科の学習支援者としての 1 年の実践, 現場を離れて書いた修論内容と現実とのギャップを感じ, 今後の論文構想に悩んでいるとお伝えした。次に福井大学教職大学院, 小学校教諭多田昌弘先生の「教師が協働する校内研究に向けて」の報告で, 校内研究を工夫してこられた先

生は, 授業報告者が公開授業をして良かったと思える校内研究を模索していると語られた。異分野の私自身, 学習者の主体性を育む活動で自身の関わり方に悩んでおり, 参加者の方々からの質問や共感を伴う助言 1 つ 1 つが私の心にもしみ入る実感があった。特に幼稚園副園長先生の「子育て支援について地域の大人たちが熱意を持って学習し, 親を巻き込んだ支援活動が考えられていることに勇気づけられた」という言葉に私自身も励まされた。

SESSION4 では, SESSION1 と同じグループに戻り, 全体を振り返り, 異なる専門分野でも同じように子どものことを懸命に考え, 教育に関わる熱心な取り組みがなされていることに共感し, 他領域とのつながりを実感し, 実践で感じている限界や壁を乗り越える勇気や意欲が出てきたことを確認した。そして実践を省察し継続的に本音で語り合う場, 共感する仲間が存在が, 壁を超えコミュニティを実践的な組織へ変化させるのではないかと, という展望を持つ事ができた。

参加し「明日も頑張ろう」という勇気が湧き上がってきた。関係者の皆様, 出会えた方々に大変感謝しています。

ラウンドテーブルに初めて参加して

光道園 ライトレーニングセンター 吉田 茂

今回、初めて、福井大学のラウンドテーブルに参加させて頂きました。参加者は、学校の先生が中心で、他に看護師の方や私のような福祉施設の職員などいろんな職場や立場の方が参加をされていました。いろんな分野の方と2日間、真剣に語り合えたこと、とても貴重な体験をさせて頂きました。

初日は、4つの領域の中から、「特別なニーズのある人との係わり合いから何を学ぶか」の分野に、発表者として参加しました。今回、私が勤務している福祉施設の盲ろうの障がいを持った利用者さんの事例について話をさせて頂きました。利用者さんのことを全く知らない環境の中で、伝えていくことの難しさも痛感しました。私自身、ビデオ映像をもっと使用して話を進めていけばよかったなど、反省点の多い発表でした。ただ私のテーブルに参加された方は、いろんな職種の方でしたが、真剣に私の話を聞いて頂き、また発表後の語り合いの中でも、良い意見もたくさん頂くことが出来ました。同じテーブルの参加者の中で、看護師の方から、利用者さんが、部屋で裸で毛布に包まって寝ているのは、母体に還るような気持ちで、毛布に包まって、安心感を得てるんじゃないん

ですかという意見を頂きました。私の中で、利用者さんの謎が、点が線になってつながっていく感覚を得ました。今回の看護師さんの意見を心の中にしっかりと受け止めて、今後の利用者さんとの新たな支援へとつなげていきたいと思います。2日目も小グループに分かれて、2人の学校の先生の取り組みの話を伺いました。2人の先生とも、生徒さんのことを真剣に考えて、取り組んでいる気持ちが伝わってきました。普段、なかなか聞けないお話を聞けました。特に理科の実験での話は、プラナリアという生物が無性生殖等で子孫をふやしていくことを知り、知らないことを素直に知ることが出来て、楽しいひと時を過ごさせて頂きました。事例の話の後の語りの部分では、お互いの悩んでいることに対して、みんなで真剣に話をしていたことが、とてもよかったと思います。

最後に、2日間のラウンドテーブルに参加をして思ったことは、環境や立場は違っても、人のことを思いやる気持ちの根っこ部分はみんな同じなんだと改めて、感じる事が出来ました。いい学びの場に参加出来たこと、感謝します。ありがとうございました。

福井ラウンドテーブルに参加して

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コース2年／福井市明道中学校 北 典子

今回、「専門職として学び合うコミュニティとしての学校」のBグループに参加しました。至民中学校と美浜中学校の協働研究の展開と構成に関する取り組みについて報告がありました。その報告から、学校文化を育むには次の3つの条件が必要であると感じました。

- 既存の学校組織を変革した協働体制が定着し始め、教員集団の意識の変容と研究の進化につながっている。
- 教職員が学び合う環境の中で、教職員の志向性が協働文化を生み出している。

○それに呼応して、生徒も学び合う集団に成長している。

教師間と生徒間に生まれた協働関係が相乗効果となって、理想的な学校改革が着々と進んでいる事例紹介の後、学校教育のあり方や教師の意識についてさまざまな意見が交わされました。私自身が、とても衝撃を受けた発言は次の2つです。

1つは、渡辺先生が言われた「教師自身が学び合う意義を感じているのだろうか、そこが問題である。」という指摘です。もう1つは、今春、福大教職大学院のストレートマスターコースを卒業し、地元の中学

校で講師をされている T さんの苦悩に満ちた語りでした。黒板とチョークで進められる全教科講義式の授業実態に、2年間の学びの意味を問う葛藤と現状打破の危機感にさいなまれる日々を、切々と語る彼女の真摯さに圧倒されました。改めて旧態依然とした日本の学校教育の実態を痛感しました。教育基本法の改定以降、その趣旨を生かす教育改革の必要性が叫ばれながらも、広く現場に浸透していかない現実を知りました。本大学院に集う先生方が、当たり前の実践として共有する“授業改革”，“教師の意識改革”，“学校改革”は、実態離れした理想論なのか。“改革実行”に伴う労力に不安を感じ、保守保身に流れがちな教職員の意識を希望に変え、やりがいを見い出す原動力は何なのか。私は、同僚と同じ目標に向かって協働する経験から得られる“手応え感”が原動力に転換

されるのだと思います。「コミュニティ」の意義と構造のメリットを再認識するとともに、協働関係の形成には意図的に仕組みを整え、学びを共有する場の設定が重要だと気づき、以下の3つを考えました。

- ①核となって“改革”を進めるリーダー的役割の教師1~5人を各学校に配置する。(学校規模に応じて)
- ②①の研究の核となる教師は、地区の授業研究会で指導的な役割を担って教科研究の協働関係を構築する。
- ③小・中・(高...受験)・大学が連携し合い、時代の要請に応える授業改革を進めていくことに挑戦する。

この2日間で、スクールリーダーコースで学ぶ意義、使命、責任の重さを新たに自覚し、身が引き締まる思いです。

Newsletter No.89(16.10.15)より

「夢 語ろう会」を通して感じたこと学んだこと

ポスターセッションを通して学んだこと

福井市至民中学校 教諭 宇原 弘晃

昨年度に引き続き、至民中生徒会としてポスターセッションに参加させていただいた。クラスター長3人をポスターセッションに参加させていただいた。私自身、ポスターセッションに参加をするのは初めてであったが、一部の生徒が昨年度参加をしており、前回の発表の様子を聞きながら準備を進めてきた。

まず生徒たちに「至民中の何を語りたい?」と問いかけた。すると、生徒たちから「学校のつくりを伝えたい。」「至民祭(学校祭)を語りたい。」「クラスターの行事もいいね。」と、語りたい意欲に溢れている様子であった。話し合いの結果、ポスターを3枚使い、①全体的な学校紹介(教科センター方式・異学年型クラスター制・校舎)、②中央委員会(生徒会)の取組、③地域とのつながりの3つの柱で紹介することに決めた。それぞれ3分程度発表し、発表後に質疑応答の時間を設けることにした。準備は昼休みや始業前の

時間に行った。本番1週間前には、プレ発表会を行い、生徒たちがお互いに発表のアドバイスをし合った。

当日は安居中学校・附属中学校・本校の順で発表することとなった。何より驚いたのは、両校の生徒たちが、原稿を見ずに、自分の言葉で学校を語る姿である。質問に対しても、取組に対する思いを熱く語っており、自分たちの取組に誇りを感じている様子が伺えた。自信を持って語る姿に本校の生徒たちも圧倒されている様子であった。

発表の順番が回ってくると、生徒たちは緊張しながらも発表することができた。また、質問に対して彼らながらに知恵を出し合い答えようとする姿は素晴らしいものであった。発表直後、生徒たちは「あまりうまく伝えられなかった」と悔しそうな様子であったが、大学の先生方から「至民中いいね」「至民中の生徒になりたい」などのお褒めの言葉を頂き、誇らしげな表情を見せてくれた。

その後の「交流タイム」では、他校の生徒たちと歓談し、今後の生徒会活動に繋がるアドバイスをもらったようであった。

今回ラウンドテーブルという場で、至民中について発信する機会を頂き、生徒たちは改めて至民中について見つめ直し、彼らの取組の意味に気づいたよ

うであった。また、語る場を通して、生徒たちに学校のリーダーとしての自覚も強まり、今後の活動への意欲も喚起されたようであった。今後、他校の実践も取り入れながら、生徒活動の充実を図るとともに、胸を張って学校を語れる生徒を育てていきたい。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

山梨県総合教育センター 指導主事 篠原 弘一

今回はじめて、福井ラウンドテーブルに参加した。詳しい内容もよくわからない中での参加であったが、どんなことが待っているのかワクワクした気持ちで福井駅に到着した。会場の福井大学は、たくさんの人の熱気で溢れていた。その中で「実践し省察する」ことができた。

1日目に参加したシンポジウムは、「21世紀の教師教育をイノベーションするー学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問うー」としたZONE-Bであった。変わろうとしている教育に対応するためには、長期的な学校改革が必要になる。一昔前は、スーパーティーチャーがいて、子供たちと素晴らしい関係を作り…という時代があった。そのためには、一人一人が「力をつけて」ということが求められた。しかし、現在はチームで取り組んで行くことが求められている。そのためには、マネジメントの必要性、リーダーの存在がクローズアップされてくる。

シンポジウムの中で、福井大学教職大学院の三田村彰氏は福井大学で行われている幅広い養成内容の

中で、ミドルリーダーの育成がキーワードになっていること、国立高等専門学校機構の加治佐哲也氏は、学校現場を離れて大学等でしっかりと研修を行うことで、様々な知識・実践力が得られること、文部科学省高等教育局の柳澤好治氏は、管理職コースのある大学の実態、また、そこで培っていく内容として、地域住民や関係機関との連携をあげていた。福井新聞の遠藤富美夫氏からは教職員の多忙化解消とリーダーの役割についての話があった。自分自身が、企画・運営に関わっている研修会が、一人一人の先生方の知識や実践力の向上、ミドルリーダーの育成、マネジメント力の充実に役立っているか、話を聞きながら、改めて振り返ってみた。続くフォーラムでも、それぞれの立場で自分の経験してきたことをファシリテーターが言葉をつなぎながら議論を進め、参加者の想いや実践を語り合った。居心地の良い時間を共有し、充実した時間を過ごすことができた。

もがき続ける日々

仁愛大学 准教授 西出 和彦

私は『力』という言葉は使わない。『力』ってなんですか？」

「私は、『技術』と表現している。『技術』はある。」・・・
三人が立っているところに、ある議論が始まりました。三人のうちの一人名となった私は、実際には、お二人の議論の間に入って、双方の主張を理解しようと努めたに過ぎませんが、私にとって、とても心地よい時間が流れました。

なにより、私にとって重要だったのは、ひとつひとつの言葉を捕らえ直し、考え直す時間がもてたことです。その時間は、それからまもなく私の頭の中で、いろいろな考えを刺激していきました。まさに、触発された訳です。

立場やアプローチが違うことで、考え方や主張が異なる様子を間近で拝見しました。また、一見異なった主張のようで、実は、言葉の使い方や表現が異なっているだけの場合も起こりえます。いずれにしても、とても刺激的でした。

私は、教育には常に新しいアイデアが必要だと思っています。

教育の世界では、事象間の因果関係は必ずしも明快に表出しないのではないかというのが私の考えです。そのような認識の中で、「それって、どういうこと？」と問うても「分からない」という答えが返ってくるのが多く、もがき続けることになります。うまくいく場合もあれば、うまくいかない場合もあるからです。だからこそ、常に新しいアイデアが必要になります。

冒頭の模様は今回の懇親会での一幕ですが、ラウンドテーブルを含めて、異なる見方や考え方に会ったことによって、新たな発見や新しいアイデアにつながりました。考え方や主張の違いが対立にならず、違いを認め合いながら、議論が進みました。だからこそ自分にとって新たな発見と感ずることがあり、アイデアが浮かんだのではないのでしょうか。多様であることの重要性を感じます。このような機会に参加し、率直な意見交換を行い、自分の考えを整理することこそ重要なのだと思います。

有意義な時間をいただきまして、本当にありがとうございました。

「聞くこと」「語ること」の学びの深さを知るラウンド

玉川大学 教育学部教育学科 4年 佐久間 歩

福井のラウンドテーブルには初めて参加させていただきました。いまだかつて、この2日間ほどじっくりと人の話を「聞き」、自分の実践を「語る」ことはなかったです。「聞く」、「語る」ことによって自分の学びが深まっていく感覚が、2日間を通じてあり、自分の価値観が揺さぶられました。福井のラウンド1日目、2日目を通して、私自身が何を学んだのかを執筆しながら振り返りたいと思います。

1日目、私は ZoneC2 の「地域と学校はいかに学び合うのか」に参加しました。ポスターセッションでは、福井大の学生の実践をはじめ、福井の公民館の実践を聞きました。

福井大の探求型の学習方法に関心をしました。学生が縦割り班のように異学年と協力して、地域と関

わる実践をしていました。私も同じ学生の身。福井大の学生の実践を聞いて「負けてられないな」と悔しく思うと同時に、実践を聞いて、「自分でも何か実践ができるのではないかと新たな実践へのやる気をいただきました。

福井の公民館の実践とともに、社会教育主事の方の悩んだことや教育に対する思いを聞いて、私の教育観も深まったように感じます。その方に質問攻めをしてしまって、強欲にも2日目の報告資料までいただいていたしまいました。東京とは違った土地で実践されていること(加えて、学校教育でない社会教育のお話し)を聞くことができ、新たな実践への探究心が芽生えました。

シンポジウムでは、福井市の小学校と公民館の実践、そして長野県の教育委員会の実践を聞くことができました。福井や長野の実践は目から鱗でした。実践からは3人の先生方の熱い気持ちがひしひしと伝わってきました。地域や学校が、子どもの安心できる居場所になるためには、地域と学校が学び合うことが大切であり、その学び合いには、熱い気持ちをもった先生やコーディネーターが必要なのだと改めて気付かされました。素晴らしい実践に触れることができて、たくさん学ぶことができました。

2日目は、学生ながら報告をさせていただきました。私の報告を聞いていただき、じっくりと考えを深めることができました。自分の報告よりも学びにつながったのは、他の実践を「聞くこと」でした。私自身が6月に小学校の教育実習を終えたばかりで、教育

実習を振り返りながら長期実践を聞くことができました。特に、藤本先生の福井の教員研修の実践報告では、教員研修に始まり、学校としての組織の在り方など教育に関する多岐にわたるものに触れながらテーブル全員で考えを深めることができました。実践をもとに、生まれも経験も違う方々のお話を聞くことができ、自分の考えを深めることができる。これがラウンドテーブルのよいところだと思います。

福井ラウンドテーブルに参加できたことは、私にとって大きな一歩だと感じました。このような機会をつくっていただいた福井大学教職大学院の皆さま、誠にありがとうございました。微力ながら、こうした「聞くこと」「語ること」での学びの深さを周りに伝えていこうと思います。

福井ラウンドテーブルでの学び

長崎市立西浦上小学校 教諭 野口 将信

現職院生3人で、長崎駅を出発したのは朝の7時半であった。福井大学に行くのは3人とも初めてで、車中は少々旅行気分楽しくすごしていた。福井駅に着いたのは午後2時すぎで、長崎と同様に雨が降っていた。到着後すぐに永平寺へと向かった。永平寺の荘厳な雰囲気と古来の大木から発するマイナスイオンで、心も体もリフレッシュし、翌日の福井ラウンドテーブルにさわやかな気分で参加することができた。

1日目は、午前中に中高生によるポスターセッションが行われた。驚いたのは学生たちの質問に対する受け答えである。参加者からの難しい質問に対しても、メンバーの中の誰かが自信を持った態度でさっと答えており、質疑が滞ることがなかった。学生たちの堂々とした態度に、福井の教育の成果の一端を見た思いだった。午後からはZone Dに参加した。私はフォーラムで発表を控えており、やや緊張感を持ちながら参加した。シンポジウムでのお2人の発表は素晴らしいものであった。先生方が、試行錯誤する中で、研究を積み重ねていったことが伝わってきて、福井の教育力のもとが、先生方の日々の努力にある

ことを知った。フォーラムでは、いよいよ私の発表の番となった。私は「長崎県離島地区における小学校英語教育の実践と授業研究の実際」と題し、五島列島の小さな小学校での校内研究について、経験して学んだことを発表した。研究がうまくいかずに悩んだことや、授業研究の在り方への考え、先輩教師の姿に学んだ経験などについて話をした。離島での英語科の構築という特殊な状況であり、参加者にとって参考になるか不安であったが、参加した先生方には熱心に聞いて頂いた。発表後のグループトークでは、他県での授業研究の様子を聞くことができた。地域によって取り組み方に大きな違いがあり、自分が当たり前だと思っていたことがそうではないことに気づかされた。また、自分の悩みや疑問に対する解決のヒントがたくさん得られた。違う地域の知らない者同士が語り合うことのメリットを実感し、これがラウンドテーブルならではの学びだと感じた。

2日目は、6人グループでの語り合いが行われた。私は聞き手であったが、違う校種の先生方の実践や悩みを聞いたり、他県の教職大学院での取り組みを聞いたりする中で、様々な意見が飛び交い、多くのこ

とを学ぶと同時に刺激も受けた。長時間であったが、あつという間に感じられた。初めて経験した福井ラウンドテーブルでは、違う視点からの考えをたくさん聞くことができ、思った以


上の収穫を得た。参加して本当によかったと思っている。今後もこのような学びのチャンスがあれば、積極的に参加したいと思う。

※ご所属は当時のものです

福井大学基金にもとづく
**福井大学教職大学院
次世代教育創成資金**

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために

**次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。**



詳細はパンフレットにてご確認ください。

次回 ラウンドテーブル 2017 Summer Sessions 開催予定

2017年6月23（金）～25（日）日

Schedule

- | | |
|-----------------|-----------------------------------|
| 3/4 Sat | 第3回入学試験 |
| 3/23 Thu | インターンシップ説明会／学位記伝達式・再出発に向けたカンファレンス |
| 4/8 Sat | 平成29年度 教職大学院開講式 |

【編集後記】ラウンドテーブル2017Spring Sessionsでは、また新たな企画が生まれました。各Zoneの内容もこれまでの積み上げを基盤に深まり進化してきました。こうした変化はラウンドテーブルの持つ可能性を示すものだと考えています。一方でクロスセッションでの、語りと傾聴の時間は変わらずに続けられています。変わらないものを土台に、深める、広げるために変わり続けたいと思います。よい時間が流れますように。(A)

教職大学院 Newsletter **No.94**

2017.2.17 内報版発行
2017.2.28 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp